『出会い』

２月７日、ホスピス竣工式を無事終えることができた。金沢から福岡へ飛び出して６年、さらに函館に戻り３年が経っていた。竣工式の席では、皆が、私が「ホスピスをやりたい！」と言っていた時のことを振り返り、「１０年以上かかると思っていた」とその時の心境を語ってくれた。自分でもこんなに早く夢の実現にこぎつけるとは思ってもみなかった。その晩、美酒を味わいながら、色々なことが頭の中をよぎっていた。

２０００年夏、私は夏休みをもらい、福岡から函館に帰省し、いつものように友人たちと久しぶりの酒に酔いしれていた。近況報告をする中で、私は福岡での満たされない思いを語っていた。私が大学を飛び出したのは、ホスピスをやるためであった。

栄光病院に就職し、まずするべき事は、内科医としてスタッフからも患者からも認められることであると思った。言われたこと、頼まれたこと、ほとんど断ることも無く、時間を惜しまずにとにかく働いた。結果として、患者やスタッフともいいコミュニケーションを築くことができ、色々と頼りにされていることも肌で感じていた。おだてられればどこまでも昇り続ける単純な性格の私である。皆に引っ張られるように全力で業務にあたった。

しかし、いつまでも自分の気持ちをそれだけで引っ張っていくわけにはいかなかった。病院からは私の思いを汲み取っていただき、ホスピスでの兼務を認めてくれたとは言え、ひどい時には急性期の患者を３、４名も新たに担当するような状況の中で、ホスピスでのゆっくりとした時間の中での診療と並行して携わることに限界を感じていた。このままでは大学にいる状況と本質的には変わらないと感じた。ホスピス１本に集中したいという思いが日々湧き出てくるようになった。ホスピスでの経験から、以前より自分の中に秘めていた、“ホスピスは特別なものではない”という思いを確認することができていた。

このホスピスへの思いを友人たちに熱く語ったのだが、酒の勢いもあってか、皆、何となく盛り上がっていき、“函館でホスピスをやったらどうだ”という思いがけない話が出てきたのである。そして、この時のやり取りから、私の運命が開けることとなる。

１０月のある日、１人の友人からメールが届いた。「現在の函館医師会会長のＫ先生がホスピスに興味を持っていらっしゃるし、会ってみたらどうだ。」というもので、ある人を介して紹介してくれる話であった。別の日、もう１人の友人からもメールが届いた。「数年前にホスピスを立ち上げようとした市内Ｋ病院の元事務長が是非会いたいと言っている。会ってみたらどうだ。」というものであった。私は、早速この２人に会うことを決め、妻以外に誰にも伝えることなく、両親にも内緒でこっそりと函館に帰ったのである。

当時の函館医師会会長のＫ先生には、率直に自分の思いを話すことができた。Ｋ先生は初対面の私の話にじっくりと耳を傾けてくださり、また私もＫ先生のホスピスへの思いをお聴きした。函館に、しかも、函館医師会の中心となる人物がホスピスに関心を持っていることだけで、私は感動で胸躍らせていた。翌日は、Ｋ病院元事務長Ｉ氏とお会いした。Ｉ氏は私のことを知り、札幌からわざわざ駆けつけてくださり、ご自分が今までに書いたり、記録していたホスピス関係の資料を私に渡してくれた。Ｉ氏のホスピスへの情熱は、私以上のものであり、熱いエールを送られた。お２人と出会い、私は函館にもホスピスへの思いを強く持ち、またそれを実現しようと思っていた方たちがいたという事実だけで感動を覚えた。

空いた時間にかつて幼い時に通った元町白百合幼稚園の隣にあるカトリック教会の聖堂に立ち寄った。そこでしばらくの間、流れる賛美歌を聴きながら、幼い頃にここで過ごしたことを懐かしく思い出していた。急に望郷の念にかられた。見えない糸に手繰り寄せられるように、私はこの時初めて「函館に帰ろう」と思った。

翌年３月、函館に帰ってきた。長く離れていただけに、当初は何となく土地柄に馴染めない毎日であった。ある病院に勤務したが、今まで経験したことのないくらい、時間に余裕があり、私はいい充電期間と割り切って、暇を見つけては本を読みあさった。ホスピスをやりたかった。しかし、身一つで帰ってきた私には夢があっても、それを実現する方法を全く持っていなかった。割り切っていたとは言え、何事も前に進まないことに正直あせりを感じていた。

そんな時、何故かふと旭ケ岡の家のフィリップ・グロード神父のお顔が頭に浮かんだ。祖父が数年前に旭ケ岡の家で長寿を全うしたこともあり、グロード神父さまの理念と同施設の取り組みに大きな共感を覚えていた。そのようなことから、あのグロード神父さまなら、何かいいアドバイスを頂けるかもしれないと、いつもの思い込みと思い切りの良さで、会いに行った。

まだ函館に帰ってきて１ヶ月あまりであった。グロード神父さまからは、色々なお話を聞かせていただいたが、一言、「ホスピス、できますよ。先生の出番はなんぼでも（いくらでも）あるよ。」という言葉は、とても嬉しく、大きな勇気とエネルギーとなった。

私にとって３人の方との運命的な出会いがあった。そして、３人はその後も色々な場面でいつも的確なアドバイスやエールを送ってくださった。さらに、出会いはまた次の出会いを演出し、それらの出会いにより私の運命は次々に開けた。

竣工式の日、残念ながらグロード神父さまは出席できなかったが、３人との初めての出会いのことを頭に浮かべながら、感謝の思いでいっぱいであった。そして、今までは自分の夢を実現するために頑張ってきたが、これからは皆への感謝の気持ちをエネルギーに変えて、理想のホスピスを創り上げようと決意した。

（平成 16 年 3 月 13 日　著）